

## 小説家の創意とスタイル

— Arnold Bennett の *The Old Wives' Tale* に関する小説論的考察 —

高 城 櫛 秀

サマセット・モームがアーノルド・ベネットの『老妻物語』(*The Old Wives' Tale*) を批評して次のようにいつているが、今日この小説を読む読者によく分る批評である。

「リアリズムも流行であつて移り変る。読者が小説に空想や、ロマンスや、興奮や、サスペンスや、驚異をもとめるときには、彼等はアーノルドの傑作を陳腐で退屈だとおもうだろう。振子がもとに戻つてきて、読者が素朴な真実や、真実らしいことや、常識や、愛情にみちた人物描写をもとめるときは、彼等は『老妻物語』にそれをみつけるだろう」(*The Vagrant Mood*, p. 230)

たしかにモームのいうように、ベネットの『老妻物語』は地味でしみじみした人生の物語である。読んでいるうちに、なんとも古臭い描写に出会したり、退屈したりするが、それ

でも人生の真実らしいものにふれた気持になる。そこには思想の対決とか、天馬空を駆けるようなロマンスはないが、生活にどつしりと根をおろした人生観や愛情や悲哀がある。この小説の主人公は英国の田舎町の洋服屋の娘、コンスタンスとソファアアの二人であつて、姉の落ち着いた引込み思案な性格と妹の浪漫的でありながらも生活力のある性格とが対照的に並んでいる。それにもかかわらず、この小説を貫いているテーマは人生の飽きない愛情の歴史である。僕達はこの小説を読みながら人生らしい人生を眺めているおもしろいがあるのである。

しかしながら、僕達の眼を五十年前に遡るのぼらせてみるとベネットのこの傑作はいま僕達が眺めている姿と違った姿になる。当時——初版の一九〇八年の少し前であるが——ベネ

ットはパリの郊外に滞在してフランスのリアリズムを研究していた。フローベールやモーパッサンの文学はベネットのよ  
うな世紀末の文学青年には新しく花々しい文学であつた。彼の  
言葉でいえば、フローベールは勿論のこと、モーパッサン  
の『女の一生』は一八九〇年代においては小説の極致に達し  
た作品と考えられていて、彼のようにパリで遊んでいた文学  
青年は口もきけないぐらいの畏敬の念をもつて見たものであ  
つた。そして彼はこの新しい文学に傾倒して、彼は彼なりに  
自家業籠中のものにしたのである。

彼はフランスのリアリズムを研究して、『五つの町のアナ』  
(*Anna of the Five Towns*, 1902) や『老妻物語』でそれ  
を實踐したが、その英国小説史的な意味は、彼がフローベール  
流の客観的描写法をもつて、ヴィクトリア朝風の従来の小説  
の伝統を一応否定したことであつた。彼はこの『老妻物語』  
を書くにあたって、新人小説家としての二つの態度を意識し  
ていた。それは作者が一九一二年版に新たに書き加えた序文  
のなかでいつているように、まず「作者が主人公に同情をも  
たなくてはならないのは絶対の掟である」という態度であ  
り、つぎに「リアリズムの小説の傾向は主人公達をvariety  
ものにすることに反対する。群衆のなかに入れば目立たなくなる  
ような人物を選ばねばならない。」という態度であつた。

ところで第一の態度は別段新しいものではない。一人一人  
の小説家をとりあげて、彼等の作中人物に対する愛情をしら

べてみれば複雑な様相を示すにちがいない。しかし一般的に  
みれば大抵の作家は自分の主人公に愛情をいだいている。だ  
からベネットも第一の態度を小説家の「絶対の掟」であると  
呼んでいる。彼は、英国小説のみならず、小説一般の伝統的  
な作法を作家の立場からそう理解していたのである。しかし  
ながら彼の第一の態度に対する意識に光をあてて、彼の心の  
奥をさぐつてみれば、それは彼自身が意識していたほど簡単  
なものではない。なるほどベネットはこの小説の主人公のコ  
ンスタンスやソフアイアや副人物のクリッチロー氏をはじめ  
とする人物達に素朴な愛情をいだいていたが、だからといつ  
てその素朴な気持もけつして額面通りに受けとることの出来  
るような品物でない。簡単にいえば、彼は主人公に愛情をも  
つていたものの、心の底のどこかで高踏的な場所から彼等作  
中人物を見下していたのである。ベネットは新しいフランス  
文学を研究したインテリであり、芸術の道を一生歩む小説家  
である。ところが一方彼の愛する作中人物は（少くとも『老  
妻物語』の人物は）彼の故郷の田舎町の泥臭い連中である。  
そのうえベネットという男は大変器用な才人であつて、才人  
にありがちなスノバリーも身につけていたのである。あれや  
これやの事情から、彼はコンスタンスやソフアイアや、クリ  
ッチロー氏を愛し慈しみながらも、「作者は主人公に同情を  
もたねばならない」と言い切つたほどには素直になれなかつ  
たのであろう。

第二の態度は第一の態度にくらべて新しい意味をもつていたが、第一の態度よりも比較的簡単に、あるいは素直に実践されている。というのは、彼は、フローベール流のリアリズムの基礎をなしている典型という観念を平均という観念とためらうこともなく同一視して考えていたからである。ボヴァリー夫人やジャンヌがその時代の典型的な人間像であり、同時に個人であるという小説の方法論を、ベネットは群衆のなかに入れば目立たなくなる人物を主人公にして小説を書けば達せられると安心して考えていたのである。僕はベネットのリアリズム解釈を浅薄だと考えている。何故ならば典型といひ個人といひ、それらの観念は人間性のうえにたつてはじめて成立し得る観念があり、群衆という言葉であらわされる人間の数量的な拡がりとはまったく別のものであるからだ。極端にいえば、典型であり個人である人間を描くためには、少しぐらい変りものでもよいからなにか人間性のきらめきをもっている人物を主人公にする方が、ただ群衆の一人であるからだけの平均人を主人公にするよりはるかに正しい書き方だと僕は考えている。それはともかくとして、ベネットは幸か不幸か、自分のリアリズム解釈に対してなんらの疑いもいかなかったのである。それで彼は自分の小説中の人物を創造するにあつて、英国の田舎町の平凡な男女の間からコンスタンスやソファリアを勇敢にしかも安心して創りあげたのであつた。

いまのべたように、ベネットのリアリズム解釈は勿論浅薄である。だが彼の才人的才能はそのような浅いリアリズムをもつてしても、英国の小説史上に当時としては重要な役割を演じてみせたことを僕は忘れてはならない。彼は利巧にも、自らの解釈をヴィクトリア朝風の小説の伝統のアンチ・テーゼにおくことによつて、反ヴィクトリア朝的流行の波にのり、新人としての意味を獲得したのであつた。ヴィクトリア朝風の小説の特徴についてはいろいろに語ることが出来るとおもうが、ベネットはそれらのヴィクトリア朝風の小説の特徴のなかから一つの重要なエレメントをみつけ出していつたのである。たしかにデッケンズの小説には一風変つた人物がいる。サッカレーの主人公はデッケンズのそれと違つた意味で平凡ではない。シャーロット・ブロンテの人物も、ステイーヴンソンの人物も群衆のなかに入れば目立たなくなるような人間ではなかつた。彼等は大体においてあまりにもキャラクタータリステイックな人物である。ベネットが眼をつけたのは十九世紀の英国の小説中の人物の姿であつた。その当時の事情からすれば、彼が「リアリズムの小説の傾向は主人公を变りものにすることに反対する」と宣言したことは、立派なフランス土産であり、ヴィクトリア朝風の小説の否定になつたのである。小説家が主人公の性格をキャラクタータリステイックな点で把握するか、ベネットのようにリアリズムのいう典型で把握するかは單なる創作技術の問題にとどまらず、

さらに小説家の人間観までに発展するものである。ベネットのリアリズム宣言は小出しであり、微温的であつたが、このように新人的意味を充分にもつていたのである。

## 二

ベネットが『老妻物語』を書かうとした動機については、興味あるエピソードがあるが、この話はかなり有名であるから簡単に紹介しておく。一九〇三年の秋のある夜のことであつた。彼はパリの小さなレストランで食事をしていた。ちょうどここに一人の年とつた女が居合せていたのである。この老婆は醜く太り、下品で、身振りも話も奇矯であつた。店内の人々はこの老婆の姿をみて当惑したり腹を立てたり蔑んだりしていた。そのとき、ベネットは若くて美しいウェートレスがこの年とつた女をさも軽蔑しきつた顔で眺めているのをちらつとみて、感慨をいだいたのである。——この老婆にも姿心の若やいだ少女時代があつたはずである。こうした人生の移り変りにはペーソスがある。しかも、少女から老婆に移り変つていく長い年月は、自分でも気づかないほどのデリケートな変化の連続なのだ。こう考えるとペーソスはなお一層深まつていく、と。

このエピソードはさきにあげた一九一二年版の序文のなかでもいつているが、一九〇三年十一月十八日附の日記にも出ていて、間違いない事実である。しかしながら僕達が注意

しなくてはならないことは、ベネットの動機のかなには、こうした感慨以外に、モーパッサンに対して新人としての対抗意識をもつていた事実がある。同じ序文のなかでこういつている。「僕は心のなかでひそかにこう決めた。僕の書く少女が肥つた老婆に移り変つていく小説は英国の『女の一生』でなければならぬ。僕は太抵の缺点をもっているが、自信だけは缺けてゐると非難された覚えがない。だから数週間たつと一歩前進することにした。僕の小説は『女の一生』をこえねばならない。このために、僕はこの小説がただ一人の女の一生でなく、二人の女の生涯でなければならぬと考えた。そういうわけで『老妻物語』には女主人公が二人いる。コンスタンスはもとからの主人公である。ソファリアは僕がギイド・モーパッサンを目ざして小説汨濫の最後の先駆者と考へないことを示したための強がりから創作したのである。」もつともベネットがモーパッサンに対して対抗意識をもつてこの小説を書いた事実には幾分疑いがある。十一月十八日の日記の方では彼はモーパッサンよりは他の小説家に言及している。

「……この小説の調子に関しては、僕は『イヴァン・イリツチ』(Ivan Ilych)のことを考へ、構成上の技術に関しては『農園の娘の物語』(Histoire d'une fille de ferme)を考へた。これらの二つ線は交錯しなければならぬだろう。僕は目の前に作品全体をはつきりと想像し、それを書きたいと希望した。」

またある批評家 (M. Lafourcade) はベネットがそのときバルザックを心に思い浮べていただろうといっている。だが、ベネットがモーパッサンに対して誰よりも対抗意識をもつたと僕は考えたい。といつて僕は『女の一生』と『老妻物語』との人物の間にこれといえるような影響があると考えているのではない。『老妻物語』の人物でモーパッサン影響をもつとも強ううけているとおもえるものはコンスタンスと息子の子のシリルであろう。しかも、この二人の人物が『女の一生』のジャンヌ母子に似ているといつても、この程度の似方ならモーパッサンの主人公をまつまでもない。僕がベネットのこの作品に『女の一生』の影響を強くみるのは、これら二つの小説が同じ時の流れに浮沈する女の生涯をテーマにしているからである。E・M・フォースターのいうように (*Aspects of the Novel*, p. p. 38—39) この小説の本当の主人公は時の流れである。そして時はこの小説で絶対者であるのだ。コンスタンスは時の流れの生んだ子供であり、この小説にはじめて登場して母親のドレスをいぢつてるときからそうである。彼女は結婚し、シリルを生む。やがて少年になったシリルは不良化し両親を落膽させるが、そのうち母親は未亡人になる。一方はなやかなソファイアも時の流れの子供である。彼女は家出してパリに住むようになるが、父の死顔もみられないような生活をしている。そののち夫に逃げられてパリで落ちぶれるが、持前の勝気と利巧な生活術によつて下宿屋の

女将になる。年とつてから彼女は姉の家に帰ってくるが、そこで彼女の出会わしたものは、裏切つた夫の惨めな死のしらせと、姉の死と、それから自分の死である。ベネットはこの小説で、われわれ人間の日常の営みは、若い娘から肥つた老婆に移り変つていく女の一生にみられるように、年々年寄つていくことだと語つているのである。彼の言う人生哲学には嘘はない。彼はこの余りに人生的な人生観のうえに腰をおろして、時の流れの移りゆく有様を落ちついた筆でじつくりと書いているのである。『女の一生』のジャンヌが時の奴隸であつたように、コンスタンスもソファイアもまた時の支配下に住む小さな人間である。

### 三

ベネットはこうにして『老妻物語』を書くと思つた。準備を重ねた。彼は気負いたつていた。だがそうしたときでも、彼は一寸とした趣味を楽しむ余裕をもつていた。

「私はアーノルドの筆蹟を高く買つていましたので、出版された本の草稿を紙屑箱からよく取り出しました。また私は夫が古い書体で字を書いて得意になつているのを面白くおもつていました。アーノルドはそのことを知つていましたので彼は私の望む書体で自分の傑作を書きました。」(*My Arnold Bennett be Marguerite, his wife*, p. 56)

これはベネットのフランス生れの夫人が語っている言葉である。

いや、僕はベネットの身の事情を書くつもりはなかった。僕の目的は、彼が『老妻物語』を書くに際していただいた新人としての意識が創作上の実践に如何にあらわれているかを研究することである。彼は、作者は作中の主人公に愛情をもたなければならぬと考えていた。そしてそれが小説を創作するときの絶対の掟があると考えていたのであつた。彼は有名な小説家が傑作を書くときに度々故郷を舞台にする便利をしつていたので、モーパッサンが『女の一生』の舞台を故郷のノルマンディーに選んだように、彼もまた「五つの町」という英国の田舎の陶業町を選んだのであつた。そうすることによつて、ベネットはその町に生れ育つた人でなければ感じえない愛着と、細かい事柄に関する知識を小説中に活用したのである。

英国の中部地方の地図を開けてみると、ストウク・オン・トレントという小都市がある。今世紀のはじめごろにはまだ市政も布かれていない田舎町であつた。そこは昼でも暗く濁つた煤煙の幕が空に垂れている陶業地で、町民はけちくさく野卑で、あくせく働いていた。いわば五十年前の英国の地方都市の一つの典型的な町である。ベネットはここで生れ、後年自分の小説のなかでここを「五つの町」と呼んだのである。ベネットといへば「五つの町」を思い出させるほど、彼の

文学と故郷のこの町は縁が深いのである。

はじめにも言つたように、僕は、ベネットが自分の小説中の主人公に対して愛情をもつていたものの、彼の気持にはまた高踏的なスノバリーもふくまれていたとおもつてゐる。そしてこれは、彼が故郷の町の人々に対していだいてゐた愛着のありのままの姿の直接的、間接的な反映であるといえるだろうともおもつてゐる。ベネットは「五つの町」から出てパリに遊んでいたインテリである。モームはその彼とパリで交際していたが、モームにいわせれば一寸気障なタイプの人インテリであつたようだ。ベネットにとつて、「五つの町」は懐しい町であるが、一面、田舎町出身のインテリの例にもれず、彼は自分の故郷をなんとなしに気恥しい野暮な町だと考えていたのである。

モーパッサンの『女の一生』にあらわれたノルマンディーと『老妻物語』の「五つの町」とは、ともに作者の故郷であるが、故郷の人間である作中人物に対する作者の愛情のあり方は随分違つてゐる。モーパッサンはジャンヌその他の人物を冷静に突きはなして愛している。彼がノルマンディーの人々に輕蔑の気持を露骨にあらわしているのは、この小説ではジャンヌの夫が妊ませた女中を小作人の青年がお金欲しさでもらいにくる場面以外にあまりない。モーパッサンはジャンヌや彼女の家族をフランスのかなり上流の家庭の血を受けてゐる人間として描いた。ジャンヌは世間的には無知だが、あ

る程度高貴な美しさのなかで暮している女である。彼女は社会や性に打ち負かされて、冷酷な時の流れの奴隷になるが、彼女が孤独な夢想に耽つているときは知性と慎しみやはにかみや、鋭敏な感性を仿かせることの出来る女である。多分、作者モーパッサンが『女の一生』の人物達に自分の感性や知性を直接移植しえると考えたと僕は想像している。少くとも階級的なセンスにおいても、作者はジャンヌをその世間的な愚しさにもかかわらず身近に感じていたことは間違いない。勿論自分より上の人間とは考えていなかっただろうが、自分より下の人間だとはけつして考えていなかったであろう。モーパッサンはジャンヌを客観的に描写するだけの冷静な愛情と闊達な批評精神をもつていたのである。

ところでベネットの事情は違つてゐる。彼は、小説中で「五つの町」と呼んだ陶業地の故郷の町で弁護士の家になれて幸福に育つたが、彼の両親に文学や芸術の教養はそれほどなかった。彼は故郷の町では紳士の家庭に生れたが、モーパッサンにくらべると、彼の両親は実利的で、宗教的に厳格な教育を子弟教育のプリンシプルにすることだけに自負をもつてゐるような人達であつた。彼にはモーパッサンの母ロオラのごとき才あり色ありといった母親に恵まれていなかった。

そのうえ、ベネットは大変器用な才人であつた。田舎町から出てきた才人にはえてして自らの才気をもつて身を飾り、両親や故郷の人達の氣質を褒に気恥しくおもつてゐる人がい

る。彼は小説は書く、通俗物ものを書く、劇を書く、ジャーナリストとしても活躍するかとおもえば、金を儲けて大邸宅を買つたり、ホテル生活をしたり、遠洋航海用のヨットを乗り廻したりするほど、世俗的にも利巧に生活したのである。

モームは彼の小説（とくに『老妻物語』）をかなり高く評價しているが、彼の世間的な器用さやお体裁を嫌つてゐた。『氣まぐれなるままに』（*The Vagrant Mood*）のなかの『私の知つてゐる小説家達』（*Some Novelists I have known*）で、彼昔はのベネットを思ひ出しながら、ロンドンの成功者の一人になつた彼のいかにも成功者然とした生活ぶりを皮肉な調子で讃めてゐる。また『要約すること』（*The Summing Up*）では、モームは彼を真向からきめつけて、彼奴は流行作家になつてからロンドンの上流社会を描こうとしたが、田舎者の故郷は田舎であり、ロンドンのホテル生活は所詮根無し草であつたので録なものが出来なかつたと書いてゐる。

僕はモームがいうほどベネットを俗物だとは考えてゐない。まあいえば、ベネットはモームと同じぐらい俗物か、モームより少し俗物であつたとおもつてゐる。多分『老妻物語』を執筆してゐた当時は、功なり名とげたときよりは、大分純粹な文学精神をもつてゐたであらう。しかしながら彼が故郷の「五つの町」の人々に愛着を感じながらも、自分の方が上等人種だという意識をもつてゐたことは間違いないと推測してゐるのである。そしてさらにすすんでいえば、W・アレンの指

摘しているように『老妻物語』のユーモアは、多分作者の故郷の人に対するこの高踏的な愛情から生れてきたのだらうと考えているのである。たとえば、「五つの町」の人々がサーカスの暴れ象を射殺する場面のユーモラスな筆致などは、作者が故郷の町の人々の気質をいやはど知り尽し、愛しているものの、「……しかし私は……」といわざるをえない彼の世俗的な虚栄心の文学的に一ひねりされた表現ではあるまいか。

「象は低いどきつという音をたてて引つくり返り、直ぐ死んでしまった。群集は喝采した。そこで志願して出た射手達はすっかり得意になつて、さらに三度屍に一斉射撃を浴びせてから、英雄気取りで彼等の宿舍へ引揚げて行つた。象は他の二匹の仲間の手助けで鉄道貨車に乗せられて、夜の闇に消えた。バズリーではいままでもなかつた、これからも恐らくあるまいというぐらゐな大センセーションがまき起つた。」

(He died instantly, rolling over with a soft thud.

The crowd cheered, and, intoxicated by their importance, the Volunteers fired three more volleys into the carcase, and were then borne off as heroes to different inns. The elephant, by the help of his two companions, was got on to a railway lorry and disappeared into the night. Such was the greatest sensation that has ever occurred, or perhaps will ever occur, in Bursley.)

この一節は特別新しきもない文章だが、象の死を書くことによつて町の人氣を巧みに伝えている。生きものを町の広場で射殺するように措置した官憲。銃殺に喝采をおくる野次馬。英雄気取りで三度一斉射撃を浴びせた兵隊達。その夜の町の興奮。平和を愛するが、もし大会の子供達がこの光景を見たら残忍としかおもえないような事件に熱狂する粗野な町民の気質が描かれている。そして僕は、「象は他の二匹の仲間の手助けで鉄道の貨車に乗せられて、夜の闇に消えた」という文章に、描写のなかに押し詰められた作者の高踏的な（いや、ひよつとすると逃晦的かもしれないが）微苦笑を読みとることが出来るのである。

また、このような描写のなかに押しこめられたユーモアの他に、もつと開け放しの笑いが『老妻物語』の至るところにある。サムエル・ボヴィー氏の齒の治療の場面もそうだし、コンスタンス姉妹の父親の病気の描写もそうである。その他一つ一つあげていけば相当な数になるとおもふが、大体のところ全篇の半分以上の文章にユーモアがただよっているといつても過言でないだらう。僕はいま全篇の半ば以上といつたが、その意味は、この小説を読んだ人なら知つてゐるやうに、全四部の物語の前半の二部が「五つの町」を舞台にしているからである。そして第三部のパリのソフアニアの部分を除くとして、第四部は人生の佞びしさをしんみり語つてゐるものの、そこにもやはり前半のユーモアが流れているのである。



しかもこの小説を理解するうえで必要なことは、この小説の女主人公達が作者の見下す町の人と同じ平面にいる事実である。コンスタンスもソフアアも「五つの町」の子であるのだ。話をモーパーッサンにもどせば、ジャンヌはノルマンディの社会の上層に住んでいる。そして作者モーパーッサンは、ジャンヌに対するときと、農民達に対するときと違った態度で臨んでいるのである。ジャンヌの夫と密通して妊娠した召使を、お金欲しきで嫁にしようとする若い農夫も『女の一生』の副人物にちがいないが、実社会においてそうであつたように小説中でもジャンヌと同一平面で取扱われていない。この点コンスタンスもソフアアもジャンヌなしでは生れてこなかつた人物だろうが、ジャンヌとまつたく別の世界の女達である。「五つの町」の人々を描写するにあたつてベネットが微笑を口元に浮べていたように、コンスタンスやソフアアを描くときにも同じように彼はその笑いを忘れていないのである。

僕はアレンの『ベネット研究』(Walter Allen: *Arnold Bennett*, p. 69 (*The English Novelists Series*) London, Home & Van Thal Ltd., 1948.) のなかの言葉で気附いたのだが、ベネットはこの小説の第三部では微笑を浮べていないのである。というのは第三部の背景はパリであつて、この大都会に憧れていたベネットがパリ人種に対して、……しかし、私は……という気持にならなくて済んだからだろう。

アレンは相当穿つて考え過ぎているかもしれない。だが僕もまたアレンのように考えてみたいのだ。何故ならば、繰りかえして言うようだが、ベネットは「五つの町」に育ち、「この町に生れた子供ならでは知り得ない」ような細々とした町の噂まで知つていて、深い愛着を感じていたが、彼のところの奥底のどこかで自分の故郷を田舎町だと卑下している様子がみられるからである。そして僕は、『老妻物語』のスタイルの性質に強く引きかけているユーモアが、作者の故郷に対する高踏的なスノバリーから生れてきているとおもつてゐるのである。

#### 四

『老妻物語』のような作風は英国の小説に稀れである。いかにも英国的なローカル色をもっているが、それでいて英国の多くの小説とどこか異質なスタイルがある。この小説にはディケンズの天才の氾濫もサッカレーのアイロニカルな表現もメレディスの莊重さもハーディの悲壮美もない。だがこの小説は作者の客観描写の奥に人生的な愛情とユーモアに彩られた文学をもっている。またいうまでもないことであるが、『老妻物語』には現代の英国の小説家の激烈さや苦悩や不安はない。この小説を読んで D.H. ロレンスの『息子と恋人』(*Sons and lovers*) を読めば、その出版の年が僅か五年しか違つていないのに、どうして小説のものとめるものがこうも

違ふのかと不思議におもうほど違つてゐる。『老妻物語』のコンスタンスやソファシアの道德や性に対する考え方はまったく文学以前の常識である。断つておくが僕は常識を輕蔑してゐるのではない。ただ、文学のふるいにかかつていない常識は常識としての価値をもつていても文学的な価値をもたないというだけである。ベネットによつて書かれた『老妻物語』の道德や性に関する考え方は彼の故郷の「五つの町」の人々の所謂健全な風儀心のもつそれである。いやこの際、ベネット自身がどのような道德觀や性に対する考え方をもちていたかは、この小説に関するかぎりでは問題にならないのだ。ベネットはあくまでも小説を書く側の人間であつて、この小説の主人公達が作品のなかの道德觀や性に対する考え方を形づくつていくのである。作者ベネットは歲月の推移のもつ人生的な意味を主人公達を通して客觀的に描写しているだけである。そこには『息子と恋人』のポール・モレルの苦惱にみちた青春のめざめなどは毛頭ない。ロレンスはポール・モレルを小説中の人物として小説的に造型しながらも、自分の青春を半自伝的に投影してゐたのである。ポールの苦しみは性の悩みであつた。それは自己の充実を性に賭した一人の青年の不安、分裂、闘い、悲哀の物語である。ポールのエゴの確立は、作者ロレンスのエゴの確立と同じように、母親の異常な愛情の鎖から脱出することからはじまり、幼友達の少女の精神主義的な愛情の虚偽を見破り、年上の既婚の女性の性

のかげにかくされたカリキュレーションから身を退くことであつた。ところがベネットのこの作品にはそのような文学精神の一片も見当らない。まずはじめに作者は作品の「外側」に立つてゐるのだ。なるほどコンスタンスやソファシアにも戀愛があり、夢があり、叛逆があり、夢の挫折があり、倦怠、悲哀がある。しかしながら、コンスタンスとソファシアは互いに對照的な性格をもつた姉妹でありながら、しかも彼等は時の流れのなかに住む平凡な田舎女である点において共通性をもつてゐる。彼女達は人生を批判する。だが彼女達にとつて生活の原動力となるものは、彼女達自身の人生批判ではなく、逆に歲月の流れというものによつて象徴されてゐる人生からの批判によつて行動する精神である。彼女達に主体性がないわけではない。彼女達の主体性が時の流れという人生の本質に従順に従わされてゐるのである。僕がさきに『老妻物語』のテーマは時の流れであり、主人公達は時の奴隸であると書いたが、実はいま僕のいつた意味で書いたのであつた。そしてここでさらに、僕は作者ベネットはこのような主人公達を描写しながらあくまで作品の「外側」に立つていて、物語の語り手としての位置に安定してゐたことを付け加えて書いておこう。

但し勿論例外がある。パリにおけるソファシアは時の奴隸に安んじてゐないのである。僕はパリのソファシアの第三部を読みながら胸の熱くなるおもいがした。ソファシアの人生

に対する戦いは平凡な女の夢破れたのちの日の再起であつて、地を這うがごとき凡俗な戦いである。それは、ポールがエゴの自由を熱愛するために戦つた青春の争いとは違つてゐる。だが僕はポールの苦悩に身近なものを感じたとは別な感じ方があるが、パリのソフィアの人生の戦いに敬意を表したい。凡俗ではあるが、平凡な女なるがゆえに平凡な女の生きていく戦いがあるのだ。プチ・ブルジョアの女の小利巧さやけちくささや虚栄心——それにもかかわらず僕はソフィアの戦いが相当程度純粹であり、白熱している事実を認めたのである。僕は前の章で、W・アレンにサジェストされて

こういつた。作者ベネットは主人公達を愛し慈しみつつも高踏的に微笑を口元に浮べて彼等を描いたが、パリの第三部だけはそこが彼の憧れの街であつたために、彼のスノバリーは……しかし、私は……といわなくても済んだのだ、と。僕はアレンの尻馬にのつてかなり穿つたようなことをいつたが実のところ僕の本心はそうに他人の文章の裏をうかがうような気になれないのだ。僕はこの第三部で、ベネットが人生の平凡な戦いにも案外輝くような純粹性があるのだと真面目に語つてゐると考たい。だからこそ、彼の口元からあの微笑が消えたのだらうと僕は自分の考えをあらためたためたのである。この章で、作者は主人公と美しく静かに共鳴しあつてゐると僕は考へてゐる。V・ウルフはかつてゴールズワージーとH・G・ウェルズとベネットをあげて、この三人をマテ

リアリストだと否定して、そのなかでもベネットを「もつとも罪の深い男であり、職人的腕前は群をぬいて素晴しかつた。」と非難した。(The Common Reader, 1st Series p. 186)だが、あのウルフでも、『老妻物語』の第三部のソフィアの精神を、単なるマテリアリストのアルチザン的な描写による表現にすぎないと果して断言しうるであらうか。僕はそう考へないのである。

## 五

『老妻物語』のスタイルの最大の特質はその自然さである。この場合、僕の使つてゐる自然さという審美的用語の意味には無限に近いヴァリエーションの含まれてゐること注意しなければならぬ。スタイルの自然さといつてもそれは千変万化のあらわれ方をするものである。『老妻物語』の場合にはそれは、小説の進展につれて、十九世紀末の英国の田舎町の生活が時の流れにそつてごく自然に連続していく姿になつてあらわれている。繰り返してゐることになるかもしれないが、この小説には、コンスタンスの引込み思案な愛情や苦しみや哀しみが、ソフィアの浪漫的情熱や中産階級の女に特有な生活の打算があるが、人生の変化と呼ばれざるほどの変化はない。舞台背景には「五つの町」でのダニエル・ポビーの殺人事件や、パリの処刑場の描写や普仏戦争での包囲戦などがあつてかなり賑かであるにもかかわらず、コ

ンスタンスもパリのソファリアも平凡な人生の道を歩いている。パリのソファリアはなるほど一見波瀾にみちているが、彼女もまた中産階級の女の生活からはみ出ることの出来ない女である。彼女は男と手を取りあつて家出してあざむかれて貧乏するが、彼女のそのときの夢はもとの生活をとりのどすことである。この小説には、ベネットと同じジェネレーションの作家ゴールズワージーの『フォーサイト家物語』の知的な複雑さはなく、またH・G・ウェルズの『トリノ・パンゲイ』の近代商業のロマンスもない。あるものは田舎町の泥臭い生活の匂いと、平凡な人生絵図と、佻びしさだけである。敢えて人生の変化らしいものをもとれば、ベネットのいう「少女から肥った老婆に変わっていく」変化だけが、この小説の全篇を通じて認められる唯一のものであろう。

『老妻物語』のスタイルの自然さは平凡な人生を描く自然さである。そして普通このような自然さはえてして読者を退屈させがちである。しかしこの小説は退屈でない。それは作者ベネットの話術の巧みさや、作中人物を描写するすぐれたテクニクによるが、なにより作者のユーモアによつて救われているからである。ベネットはたしかに才人であつた。

彼の人生につきまとう雰囲気は芸術家的というより世俗的であるが、それはともかくとして彼は小説家としてもまことに器用な人である。彼の話術の巧みさは驚くべきもので、『老妻物語』のような平凡な人生の物語を書きながら、よくもこ

う最後まで読者を引ばつていけるものだと感心する。こと話術に限つていえば、ベネットはモームにも劣らない作家だろう。

また作中人物の描写のテクニクについていえば、例のフローベール流の客観的描写法を中心に行っているが、この方法は前作の『五つの町のアナ』において実践して、この『老妻物語』で完全に自家菜籠中のものに行っている。しかもコンスタンスやソファリアを客観的描写法で描きながらも、その方法のみにこだわらず、クリッチロウ氏などの副人物を従来の英国流の小説の書き方にしがたがつていささか変り物に仕立てているのである。フローベール流の描写法は個人を描いてその時代の人間の典型を創造し、人間のリアルな姿にせまる。

ベネットはリアリズムのこの方法を「リアリズムは主人公を変り物にすることに反対する。だから私は群集の中に入れば目立たなくなるような人物を選ばねばならないとおもつた」という考え方で解釈していた。だが彼は『五つの町のアナ』のときのようにフローベール流の（実は亜流の）リアリズムの背後でかしまつていなかった。『老妻物語』では、彼はクリッチロウ氏のごときキャラクターティックな人物を自由に創造し、このような副人物達の言動にユーモアのオブラートをきせて、主人公の描写を横から引き立たせている。勿論この小説では「主人公を変り物にしない」ことを原則にしていて、キャラクターティックな人物の描写は二の次であ

る。これがのちの『クレイハンガー家』(Clayhanger)になる。かなり強く押し出され、『ライシーマン・ステップス』(Riesman Steps)においては、ロンドンの下町の大けちん坊の夫婦が主人公となるようにまで発展する。

ところで僕は、『老妻物語』のスタイルの自然さを退屈から救っている最大のものはユーモアであると考えている。ベネットの巧みな話術や、人物描写のテクニクもたしかにこの小説の進展をだれさせない役割を果しているだろう。しかし結局はユーモアをこすものではない。僕は、この小説のスタイルの魅力が自然な筆とユーモアとが互に織りなす味わいから生れてきていると言っているのである。さて、ここで一つの疑問が頭のなかに浮んでくる。この小説のスタイルの自然さはベネットの作中人物に対する素直な愛情があつて出来たのである。そしてユーモアは彼の故郷の町に対する高踏的なスノバリーから生れている。とすればこうしたユーモアがスタイルの自然さと矛盾撞着してそれを傷つけないだろうか。僕はこの疑問に簡単に答えておこう。彼の小説家としての精神は素直な愛情に重点をおいている。そしてたとえ彼が故郷の町の人に対して高踏的なスノバリーをもつていたとしても彼の小説家としての才能が(あるいは才人的才能が)上等なユーモアという利巧な表現の仕方でもつて素直な愛情を傷つけないで、かえつてそれに味わいを加えたのであるまいか。いや——ベネットのリアリズム解釈の浅薄さを救つて、『老

妻物語』に真実性を与えているものは作者の作中人物に対する愛情である。そしてこの小説になんらかの批評精神を与えているものがあるとすれば、作者のユーモア以外にないのである。そのユーモアはもとをただせば作者ベネットの世俗的な虚栄心から発しているものであろうが。

## 六

最後に結びの言葉を書かねばならない。だが、結びの言葉になつてから僕達が語らねばならない内容があるだろう。語るつもりならばもつと早くからでも語れたはずだ。僕はいま、結びにもならない結びの言葉を書いて終りにせざるを得ないのである。

——よい小説と楽しめる小説とはかならずしも一致しない。よい小説が楽しめる小説であるときは幸福である。というもののそのような恵まれた一致は稀れであり、よい小説が楽しめる小説といえないときが多いのだ。だがよい小説が楽しめる小説でないときにもよい小説であることに変りない。

よい小説は僕達読者をどきりとさせる。そして否応なしに足をさらうのである。僕達は小説中の人物に魅せられて、小説の世界のなかで自己改造を行う。その小説の第一頁を開けたときと、読みおわつたときと、僕達自身が変つたものになつていたのである。これは素晴らしいことだ。しかしこれがまた楽しいことであるとは簡単にいえないのである。ここに二

つの小説があつたとする。両方とも僕達を魅惑する。だが甲の小説は僕達を突きばし、僕達の胸を突き刺し、僕達の内なる自我に内部革命を起させる。ところが乙は僕達を魅惑して小説の世界に僕達を吸いこむが、僕達を第一頁を開けたときと同じ姿で送り帰してくれる。僕達は一日か二日のうちの何時間かの間その小説を楽しみ、読みおわるやもとの実人生という古巣に戻っていくのである。勿論甲はよい小説であり、乙は楽しめる小説である。

では、ベネットの『老妻物語』はそのいづれの型に属するだろうか。実は僕ははつきり分らないのだ。もしも僕のよい小説と楽しめる小説の区別がそれほど間違つていなかったなら、『老妻物語』のためにこのいづれでもない第三の分類をあらためてつくらねばならないのである。この小説は僕達をどきりとさせないが、そうかつといつて僕達を読まなかつた以前の僕達のままにさせておいてくれないのだ。何故ならばこの小説におけるベネットの人生哲学の本質は年々人々は年寄つていくことである。別段僕達は彼の人生観に驚いてどきりとしないう。だが僕達が小説中の人生の有為転変を辿りながら、いつかどこかの文章でどきりとしなうとは保証しかねるからである。

そのうえ『老妻物語』は楽しめる小説である。モームのいうように、読者が小説に人生の真実や、真実らしいものや、素朴な愛情をもとめるとき、読者は空想や、ロマンスや、サ

スペンスや、驚異にみちた小説よりもこの小説を楽しむだろう。だから『老妻物語』はよい小説で同時に楽しめる小説である。しかしながらこの小説における、よい小説と楽しめる小説との幸福な一致は結びの言葉のはじめに述べた意味の一致ではない、第三のものであることはいうまでもない。

それとも、僕は『老妻物語』という古ぼけた小説を本棚から引き出して、自分の趣味を一寸満足させるために、いまさらめいた鼻屑のひきたおしをしているのだろうか。

〔附記〕 *The Old Wives' Tale* の訳名を『老妻物語』としたがこれはいままで我が国でさう呼ばれてきた習慣に従つたまでである。正しくは "A trivial story such as is told by garrulous old women". である。一言断つておく。

(本学助教授)